

過去11年間に行われた
手術症例の統計的観察

外科・胃腸科 奥村医院

奥 村 昌 明

“いわちどり”小笠医師会誌 第17号 別冊
平成元年12月発行

過去11年間に行われた

手術症例の統計的観察*

外科・胃腸科 奥村医院

奥村 昌明

はじめに

昭和47年8月より昭和58年7月までに当院で行われた入院手術症例を対象にして、年次別推移、地域別、年齢別分布、選択された麻酔および手術術式、術後の合併症、病理組織分類、術後の遠隔成績等について述べる。

1. 対象症例

昭和47年8月開業以来11年間に手術された症例の総数は、1942例である。(表1)

その内訳は虫垂切除術1309例、ヘルニア手術176例、胃切除術174例、胃癌手術80例、痔核根治手術42例、大腸癌手術32例、胆石手術29例、腸閉塞手術22例、大腸切除術13例、その他65例である。

その他には試験開腹術21例、鎖骨骨折など骨折靱帯手術16例、アキレス腱などの腱縫合7例、卵巣、子宮摘出術3例等が含まれる。

2. 成績

全手術症例を年齢別に分けてみると、(図1) 10才代から40才代に多く全体の約7割を占める。80才以上の高齢者の手術は17例で(表2) 87才の胃癌の男性に対し気管内挿管の下に胃切除が行われている。最若年の胃癌手術例は22才女性で、術後9年を経過した現在尚健康で2児の母となっている。一方4才以下の乳幼児では31例に行われており内訳は次の通りである。1才12例、2才7例、3才8例、4才4例で腸重積1例、陰嚢水腫2例、他はヘルニア根治手術が行われている。

選択された麻酔の種類についてみると、(図2)

| | |
|--------|-------|
| 手術総数 | 1942例 |
| 〈内訳〉 | |
| 虫垂切除術 | 1309例 |
| ヘルニア手術 | 176例 |
| 胃切除術 | 174例 |
| 胃癌手術 | 80例 |
| 痔核根治手術 | 42例 |
| 大腸癌手術 | 32例 |
| 胆石手術 | 29例 |
| 腸閉塞手術 | 22例 |
| 大腸切除術 | 13例 |
| その他 | 65例 |

(昭和47年8月より昭和58年7月まで)

表1 過去11年間に行われた手術症例

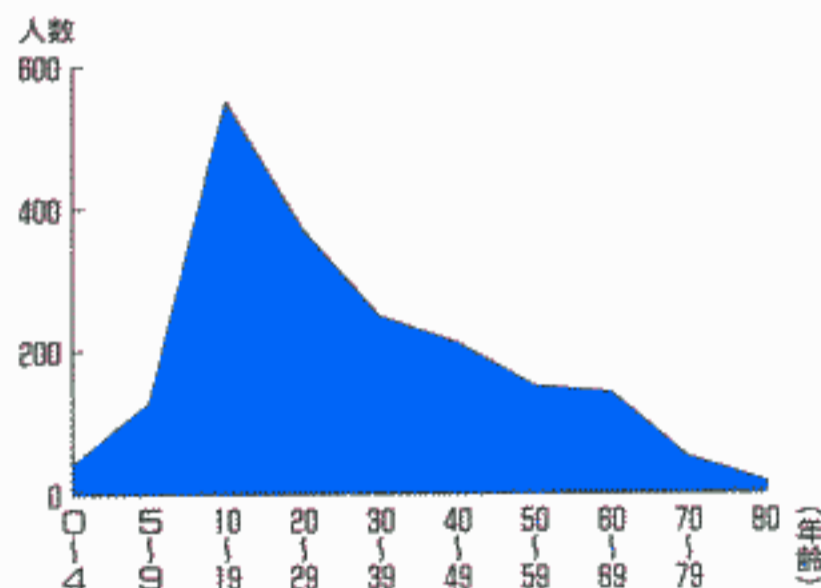


図1 全手術症例 年齢別分布

腰椎麻酔は1436例、気管内挿管麻酔339例、局所麻酔100例、静脈麻酔(ketalarによる麻酔)62例、仙骨麻酔5例、となっており、腰椎麻酔は最も多く全体の73.9%を占め、次いで気管内挿管麻酔の17.4%となっている。虫垂切除例の年次推移についてみると(図

* 第45回小笠医師会集談会に発表

| 年齢 | 性 | 手術術式 | 麻酔 | 施行年度 |
|----|---|--------|-------|------|
| 80 | ♀ | 腸閉塞手術 | 気管内挿管 | 58年 |
| 80 | ♀ | ヘルニア手術 | 気管内挿管 | 58年 |
| 80 | ♂ | 人工肛門 | 局所麻酔 | 52年 |
| 81 | ♀ | 虫垂切除術 | 局所麻酔 | 50年 |
| 81 | ♂ | 試験開腹術 | 局所麻酔 | 56年 |
| 81 | ♀ | ヘルニア手術 | 局所麻酔 | 56年 |
| 81 | ♀ | 虫垂切除術 | 局所麻酔 | 54年 |
| 81 | ♂ | 腸閉塞手術 | 気管内挿管 | 47年 |
| 82 | ♂ | ヘルニア手術 | 局所麻酔 | 53年 |
| 82 | ♀ | 虫垂切除術 | 局所麻酔 | 49年 |
| 83 | ♂ | 結腸右半切除 | 気管内挿管 | 48年 |
| 83 | ♀ | 虫垂切除術 | 局所麻酔 | 48年 |
| 83 | ♂ | ヘルニア手術 | 局所麻酔 | 55年 |
| 85 | ♂ | 人工肛門 | 局所麻酔 | 54年 |
| 85 | ♂ | ヘルニア手術 | 局所麻酔 | 57年 |
| 87 | ♂ | 胃切除術 | 気管内挿管 | 48年 |
| 88 | ♀ | 腸閉塞手術 | 局所麻酔 | 55年 |

表2 高齢者手術症例

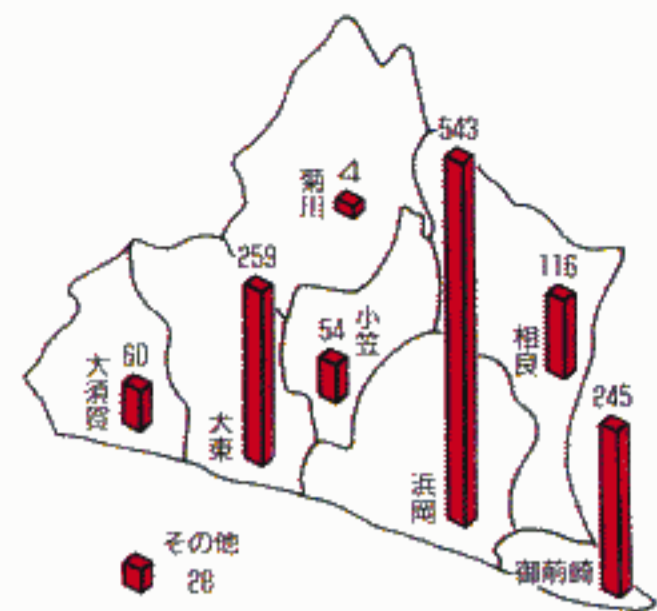


図4 虫垂切除例 地域別

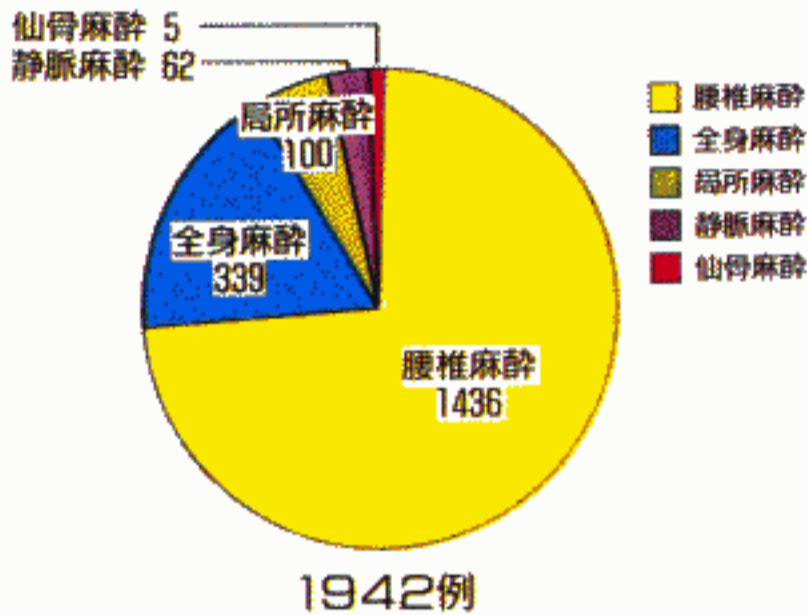


図2 選択された麻酔の種類

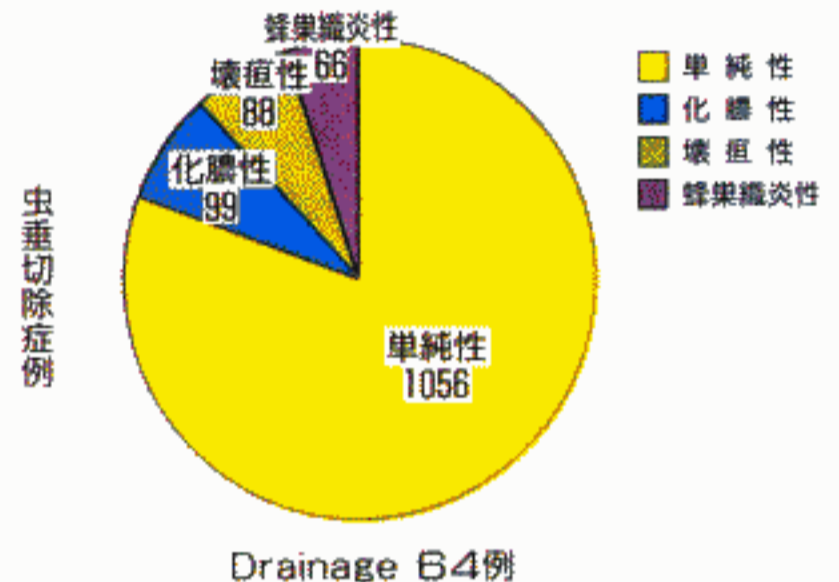


図5 病理組織別

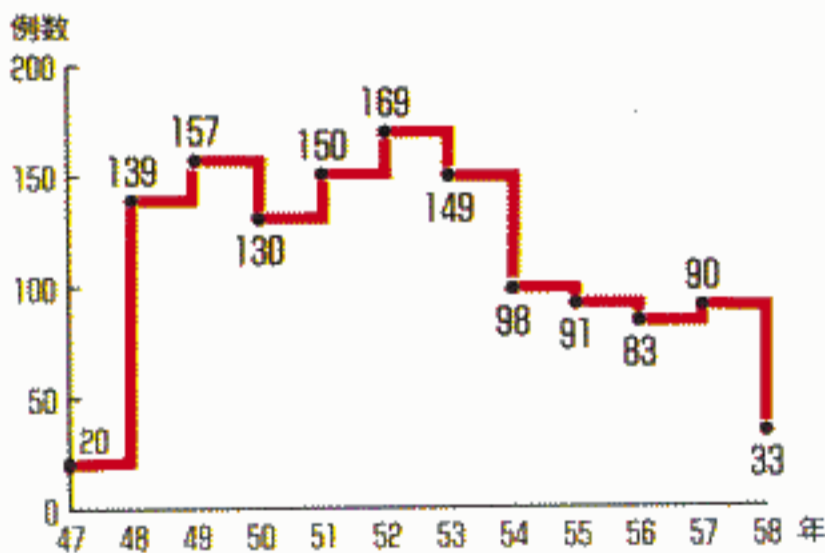


図3 虫垂切除症例 年次推移

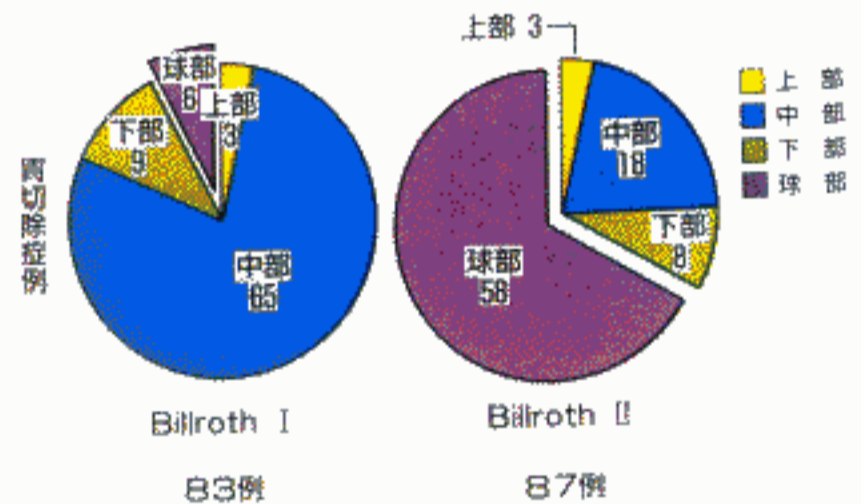


図6 潰瘍の部位と術式

3) 昭和52年をpeakに54年から減少している。地域別にみると、(図4) 浜岡町が最も多く隣接2町を含めると全体の79.2%を占める。病理組織別に分類すると(肉眼的所見であるが)(図5) 単純性虫垂炎が最も多く1056例80%、次いで化膿性、壊疽性、蜂巣織炎性の順である。壊疽性虫垂炎の中には穿孔した

ものもあり、穿孔がなくても腹膜の汚染の著しい症例64例についてDrainageが行なわれた。術後の合併症は出血、膿瘍の各1例ずつあり再開腹している。気管支喘息のある9才の男子は腰椎麻酔による手術後急性の呼吸不全により死亡している。

ヘルニアの手術は176例あり、外直径ヘル

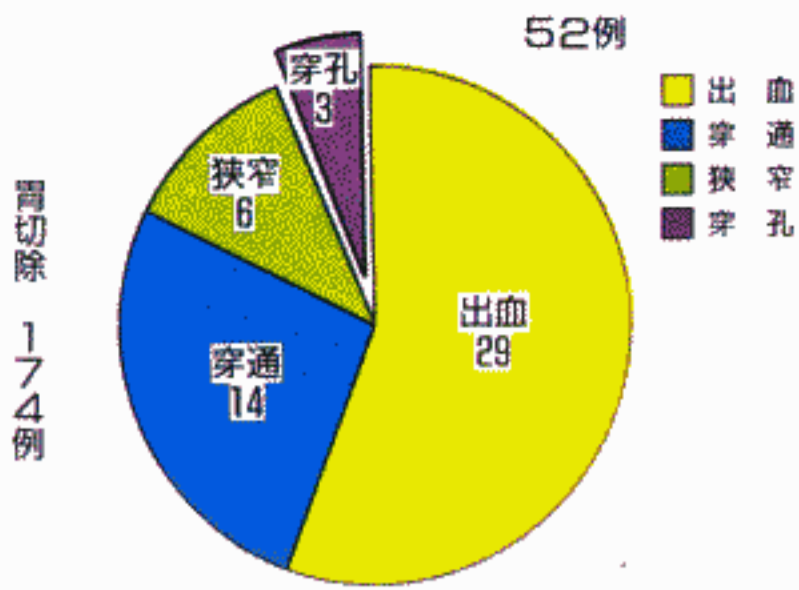


図7 消化性潰瘍の合併症

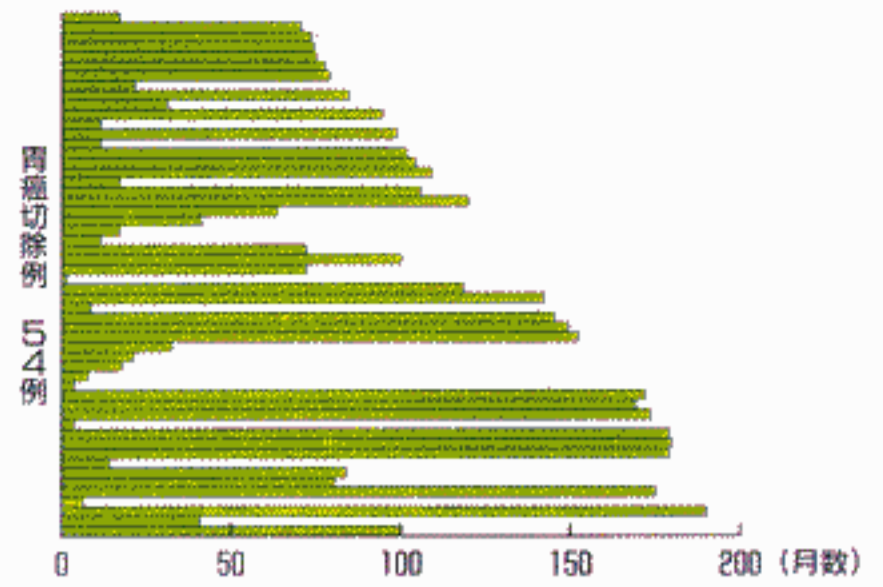


図10 胃癌術後生存年数

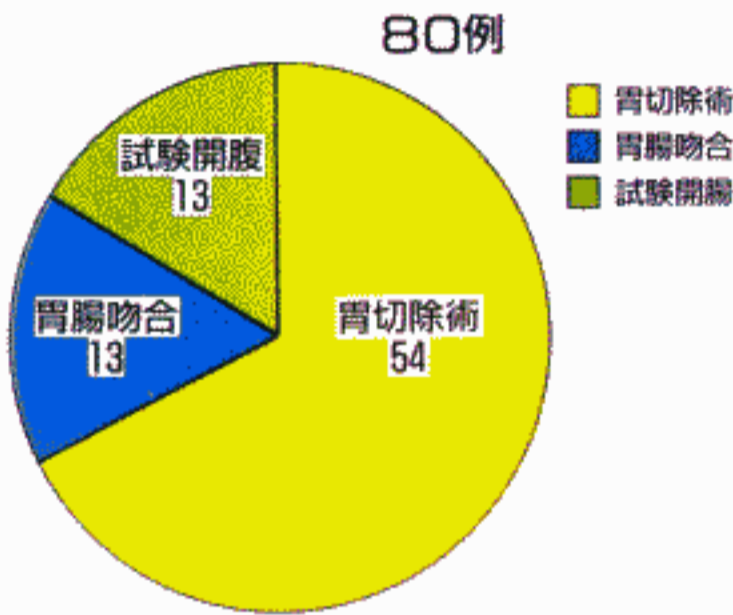


図8 胃癌手術

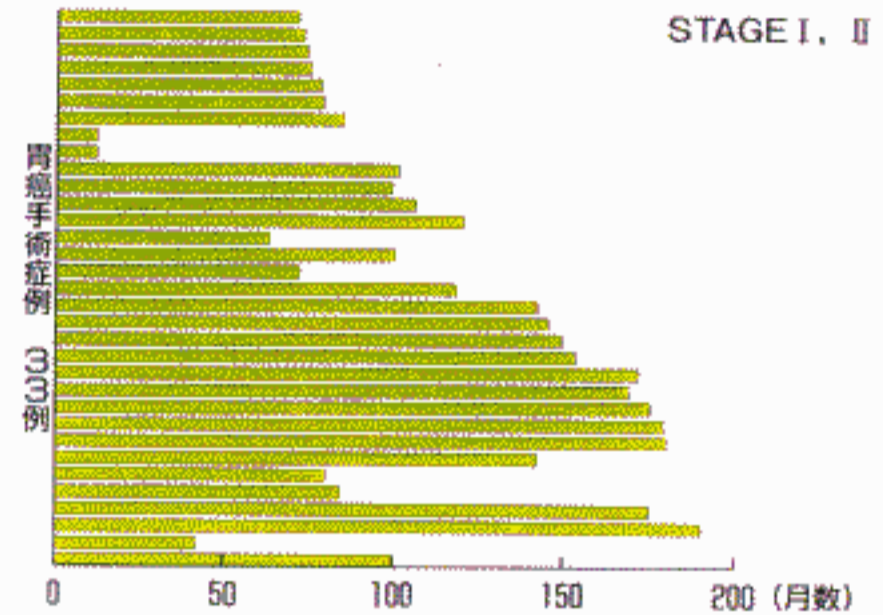


図11 胃癌術後生存年数

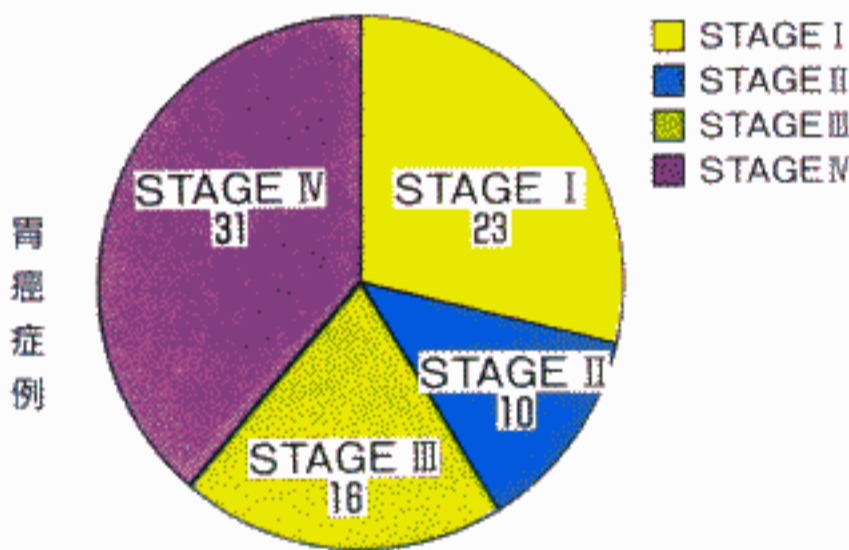


図9 胃癌STAGE分類

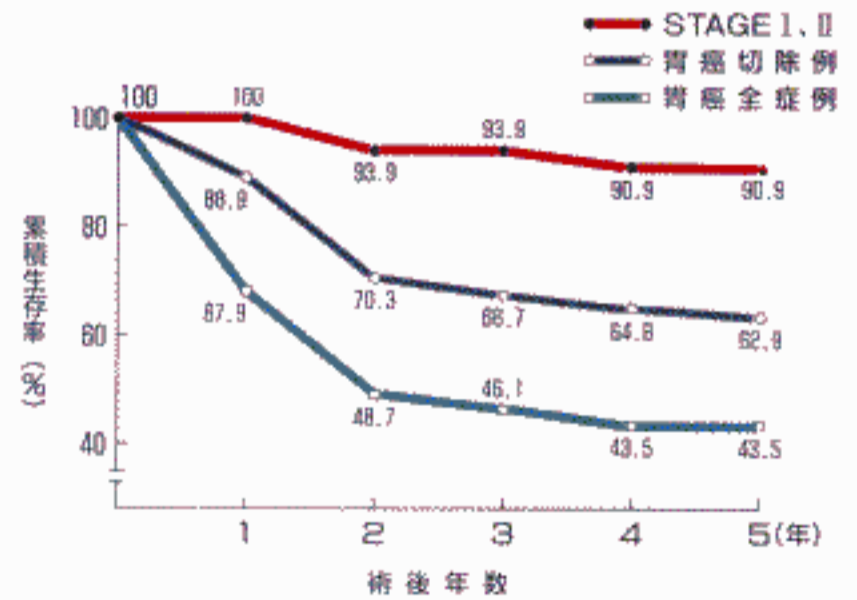


図12 胃癌の生存率

ニアは149例で84.6%を占める。その他股ヘルニア8例、内臍径ヘルニア5例、腹壁ヘルニア4例、臍ヘルニア1例となっている。

消化性潰瘍などの胃切除例は174例である。潰瘍の部位と選択された術式との関係を見ると、(図6) Billroth I法は83例、Billroth II法は87例である。十二指腸潰瘍は64例中6例

にBillroth I法が行なわれているにすぎず、その90%はBillroth II法である。胃潰瘍106例については29例(27.3%)にBillroth II法が行われている。

胃癌に対する胃切除ではBillroth I法は44例、Billroth II法は10例に行われている。従ってBillroth I法は127例、Billroth II法は97

大腸癌手術
62例

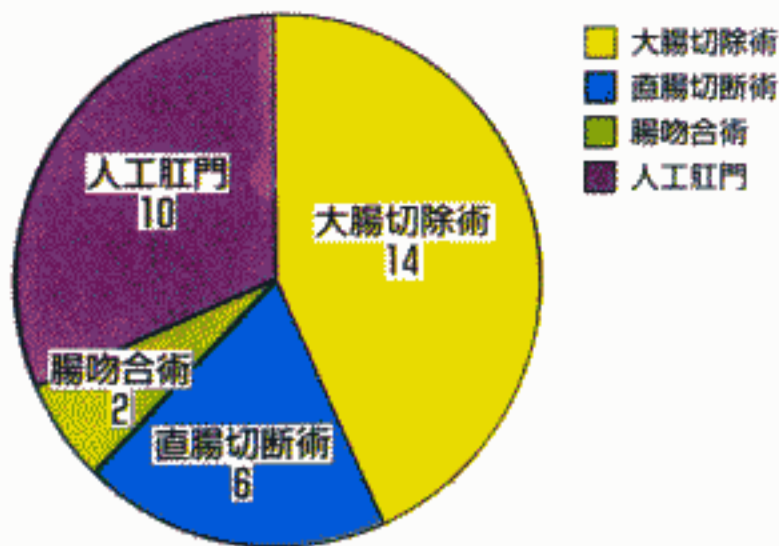


図13 大腸癌手術

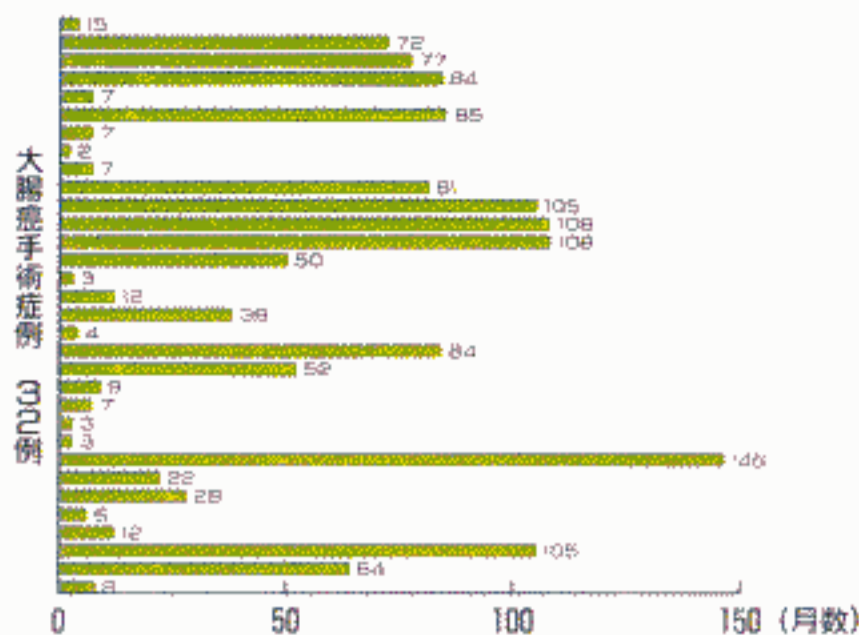


図16 大腸癌術後生存年数

大腸癌手術症例

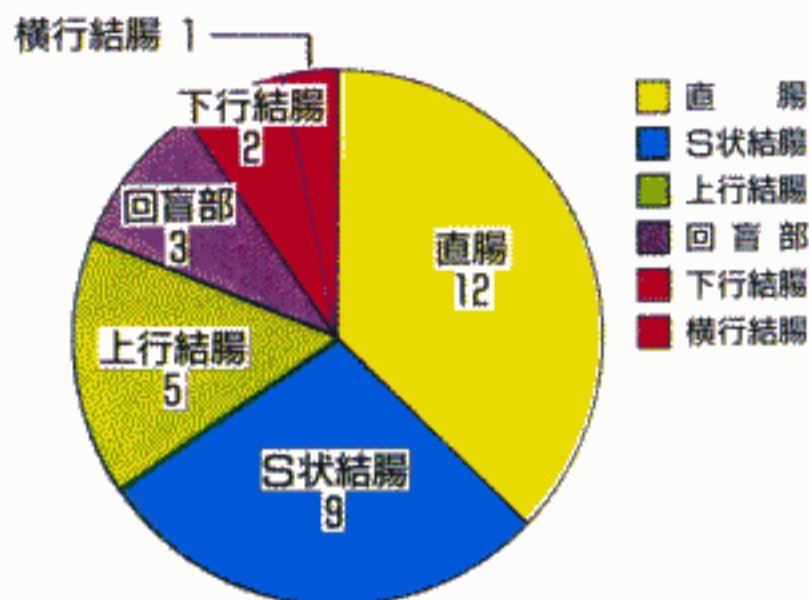


図14 腫瘍占居部位

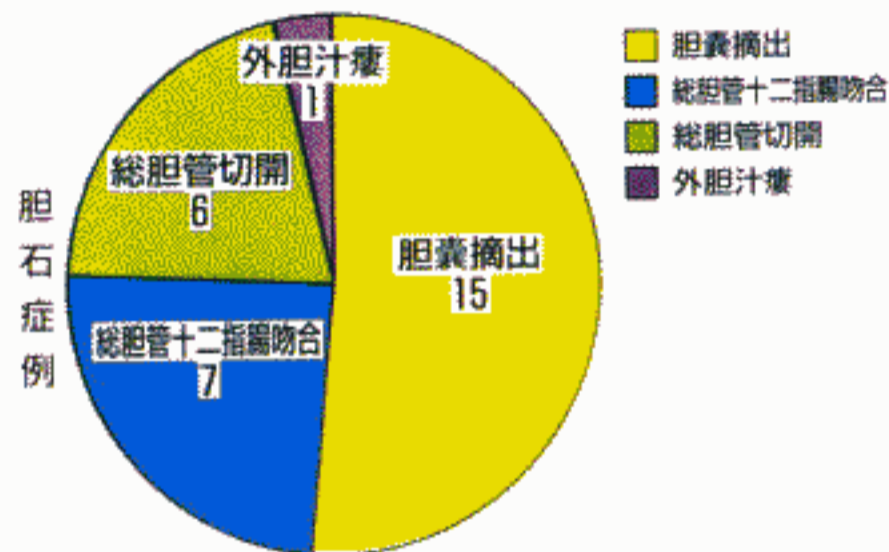


図17 胆石手術術式

大腸癌切除症例
20例

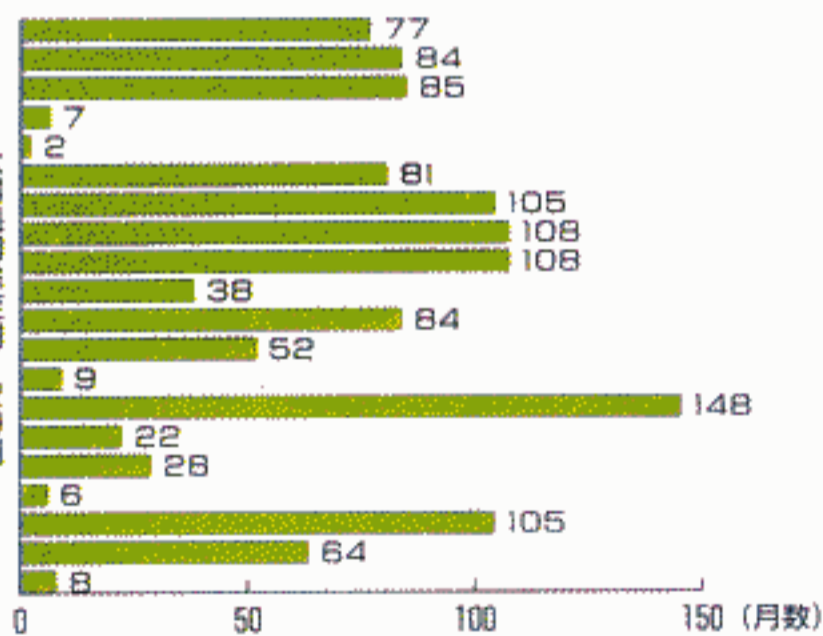


図15 大腸癌術後生存年数

例に行われたことになる。合併症についてみると、(図7) 出血29例(55.7%)で多く穿孔14例、狭窄6例、穿孔3例となっている。大量出血でShockとなり緊急手術を施行した症例は5例である。術後合併症により再手術を行なった症例は、通過障害2例、出血1例の3例がある。

術後健康調査のアンケートに回答を得た101例では Dumping Syndrom に悩んでいる症例はなかった。次に胃癌の手術であるが、その総数は80例で(図8) その内54例が切除されている。切除率は67.5%である。胃腸吻合術13例、試験開腹術に終わったもの13例でそれぞれ16.2%である。その病期をStage別に分類すると、(図9) Stage I. 23例、Stage II. 10例、Stage III. 16例、合計で61.2%となる。Stage IV. の進行癌は31例で38.7%であった。(図10) は胃癌手術全症例の術後生存年数を表している。(図11) は胃癌切除例54例の術後生存年数を表している。5年以上生存例は34例あり62.9%の生存率になる。(図12) はStage I. II 群の術後生存年数を表す。これを累積生存率で表すと(図13) に示すように胃癌切除例の術後1年生存率は88.9%、2年は70.3%、3年は66.7%、4年

は64.8%、5年は62.9%であるが、Stage I、II群の5年生存率は90.9%である。

胃癌全症例の累積生存率は1年87.8%、3年で46.1%、5年で43.5%となっている。

大腸手術は67例で、大腸癌は32例、腸閉塞手術22例、大腸切除術(良性疾患)13例である。大腸癌に対する手術は(図14)大腸切除術14例、直腸切断術6例、約6割の切除率で人工肛門造設術10例、腸吻合2例の計12例が切除不能であった。この手術例について、腫瘍の占居部位をみると、(図15)直腸12例、S状結腸9例で65.6%を占める。以下上行結腸、回盲部、下行結腸、横行結腸の順である。術後の生存年数は(図16)、(図17)に示すように切除例20例中5年生存例は11例である。腸閉塞手術は22例で、腸切除術を伴うものは9例である。原因別にみると、絞扼性イレウス15例で最も多く、次いで癒着性イレウス4例、腸重積、腸捻転、と小腸炎症性腫瘍による各1例となっている。

良性疾患による大腸切除例は、回盲部炎症性腫瘍が多く8例で、大腸憩室症3例、小腸穿孔、回腸終末炎の各1例である。

胆嚢摘出術の症例は29例で(図18)約半数の15例は単純な胆嚢摘出術が行われ、総胆管十二指腸吻合術は7例に、総胆管切開術は6例に、1例に外胆汁瘻造設術が行われた。

ま と め

昭和47年8月より11年間に行われた入院手術症例について検討した結果を報告した。

1. 手術された症例の総数は、1942例である。
2. 全手術症例を年齢別に分けてみると、10才代から40才代に多く全体の約7割を占める。

3. 選択された麻酔の種類についてみると、腰椎麻酔は1436例で最も多く全体の73.9%を占め、次いで気管内挿管麻酔は339例で17.4%となっている。

4. 虫垂切除術は1309例で最も多く、その内64例にDrainageが行なわれている。

5. 胃切除術の総数は230例であり、術後合併症により再手術を行なった症例は、通過障害2例、出血1例の3例があるが縫合不全はなかった。

6. 胃癌の手術は総数80例で、その内54例が切除されている(切除率67.5%)。

Stage I、II群の5年生存率は90.9%である。胃癌手術の最高齢は84才で、最若年は22才であった。

7. 大腸手術は67例で、大腸癌は32例、腸閉塞手術22例、大腸切除術(良性疾患)13例である。大腸癌の切除率は約60%で、その20例中5年生存例は11例である。

終りに臨み、御指導を賜った愛知県がんセンター病院・宮石成一先生、浜松赤十字総合病院・安見敏彦先生に深甚の謝意を表します。